

検査の案内が届いたのは、一か月前のことだ。白い封筒の差出人欄には「カントボーイ定期健診センター」と印字されていた。カントボーイには年に一度、おまんこの状態を検査する義務がある。制度の対象になってから実際に受けるのは今回が初めてだ。

問診票に記入し、持ち物も前日にすべて揃えた。それでも落ち着かなかったのは、当日何をされるのか案内に詳しく書かれていなかったからだ。指定された建物へ十分前に着き、清潔なエントランスへ入ると、正面に受付カウンターがあった。

「中村優です。今日はよろしくお願いします」

「はい、お待ちしていました。こちらへどうぞ」

問診票と受診通知書を提出して、受付番号のカードを受け取った。待合椅子に腰を下ろし、問診票の控えを膝の上に置く。角が折れているのを気

にしながら、指で何度も揃えた。

（緊張している）

それだけはわかった。やがて名前を呼ばれ、個室が並ぶ廊下の一番奥へ案内された。部屋には二人の男性がいる。一人は眼鏡をかけ、落ち着いた目をしていた。もう一人は人懐こい笑顔を浮かべている。

「中村さん、初めての検査ですね」

眼鏡の男性が口を開いた。声は低く、よく通った。

「はい」

「私が今日の担当、佐々木慎吾です。全体の流れを最初に説明します」

「俺は田辺亮。補助と記録担当です。……優くん、待合で問診票の角、ずっと揃えてたでしょ。緊張してるの、すぐわかったよ」

「あ……」

見られていたとは思わなかった。思わず顔が熱くなる。佐々木さんが続けた。

「カントボーイの定期検査は、触診、拡張、膈内洗浄、器具確認、精子注入の順で行います。各工程の詳しい内容は、その都度説明します。すべて終了すれば、検査済みの証明書をお渡しします」

「わかりました」

（五つもあるんだ。名前だけでは、実際に何をされるのかまではわからない）

「そんなに背筋を伸ばしていなくても大丈夫ですよ。面接ではありません

から」

佐々木さんがそう言った。声は穏やかだったが、何かを見透かすような目だった。

「では、着替えをお願いします」

衝立の後ろで検査着に着替える。前開きの薄い生地。下は紙のような素材だった。

「失礼します」

「どうぞ、こちらへ」

診察台に案内された。足を所定の位置に載せると、自然に膝が外側へ開

く格好になった。顔が熱い。

「中村さん、力が入っています」

「す、すみません」

「謝らなくていいです。ゆっくり息を吸って、ゆっくり吐いて」

言われた通りにした。少しだけ肩が下がった。佐々木さんが手袋をはめ、田辺さんも新しい手袋を取り出した。

「では始めます。まず外側の確認からです。声が出ても構いません」

「わかりました」

（きちんと指示を聞いて、動かないようにしよう）

指が触れた。検査着の裾が持ち上げられ、専用の下着が慎重にずらされ

る。空気が肌に当たって、思わず息をのんだ。

（見られてる……ッ）

佐々木さんの指が、そっと外側に触れた。人差し指の腹を使って、割れ目の外縁を上からゆっくりと押さえる。力はいれない。ただ形を確かめるように丁寧に触れていく。

「んっ」

（声、出ちゃった……）

「外縁の確認が取れました。少し指を入れます」

「はいッ」

指が一本、ゆっくりと入ってきた。入り口の輪郭をなぞるように、くる

りと内壁の縁を確かめる。深くは入らない。ただそこだけをじつくりと何度もなぞられた。

「んっ……♡あ……ッ♡」

ぐちゅ♡

「もう少し奥を確認します」

指が二本になって、内壁をなぞるように奥へ向かう。

ぐちゅ♡ぐちゅ♡にゆる♡ぐちゅ♡ぐちゅ♡にゆる♡

「あっ……♡んう……ッ♡」

（指が増えたただけなのに、声まで押し出される。動かないようにするだけ

で精いっぱいだ)

「声は出していいです」

「……はい」

「やわらかいですね」

佐々木さんがそう言った。記録を読み上げるような口調だった。田辺さんが手元のノートに何か書いている。

「……ここを押しますよ」

佐々木さんの指先が、膣壁の少し奥にある上側のあたりを軽く押した。

「んあッ……♡そこ、は……ッ♡」

(そこ……。そこだけ、触れられた瞬間に奥からぞくつとする)

「反応しましたね」

佐々木さんの声が、ほんのわずかに変わった。記録を取るだけだった目に、僕の反応を観察する色加わる。

「少し念入りに確認します」

そこを指の腹で押し上げるように、ゆっくりと擦られる。急がず、規則的に刺激を繰り返された。

ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡にゆる♡

「んあ……ッ♡そこは……ッ♡強くしないでください……ッ♡そこだけ、触られ方が違って……ッ♡」

「記録のために状態を声に出す必要があります」

「……わかりました……ッ♡でも……ッ♡こんなことまで、口にするんですか……ッ♡」

田辺さんが横から口を挟んだ。

「優くん、そんなに真面目に我慢しなくていいよ。体の反応を記録するのが目的だから、むしろ正直に出てくれた方が助かる」

（隠すほうが検査の邪魔になるんだ。恥ずかしくても、感じたことを答えなければならぬ）

ぐちゅ♡ぐちゅ♡♡ぐちゅ♡♡

「状態の確認が取れました。……田辺くん、クリトリスの確認を手伝ってください」

「了解です」

田辺さんが台の横に移動した。二人が両側に立つ格好になる。

（今度は二人で……。中を触られたまま、外まで見られるんだ）

「クリトリスの感度確認も触診に含まれます。中村さん、力を抜いてください」

「は……はい……ッ♡わかりました……ッ♡」

佐々木さんの指が内部に収まったまま、田辺さんの手が伸びてきた。

「まず包皮の状態から確認しますね。……あ、優くん、息止めてる」

「え……ッ♡」

「息して。ゆっくりでいい」

田辺さんの声が近かった。佐々木さんとは違い、観察するというより僕を気にかけるような言い方だった。田辺さんの指先が、クリトリスのある部分をそっと上から押さえる。手袋越しの指が直接触れただけで、息が詰まった。

「ひゃっ……♡ん、あ……♡♡」

「もう反応してる。……包皮を剥きますね」

「え……♡♡あ……♡♡そういう……確認が……♡♡」

田辺さんの指が包皮をそっと押し上げた。覆われていた部分が露出した瞬間、空気が直接当たって体が跳ねた。

「あっ……♡♡ひゃ……♡♡♡♡」

（剥かれた……♡♡直接、空気が当たるだけで震えてしまう……♡♡）

「これだけで声が出るんですね」

田辺さんが言った。分析ではなく、感心するような声だった。

「確認のために必要な発言です。……指で触れますよ。動かないでください」

佐々木さんが静かに言い添えた。田辺さんの観察を受けながら、記録を続けている。田辺さんの指先が、剥けたばかりの粘膜にそっと触れた。一点だけ軽く触れて、離れる。また触れて、再び離れる。

「んあ……ッ♡♡んっ……ッ♡あ……ッ♡触れては離れて……ッ♡次に触られるのを待ってしまいます……ッ♡♡」

「佐々木さん、内部との連動反応確認のために指を動かしてもらえますか」

「わかりました」

佐々木さんの指が内部でゆっくりと動き始めた。さっき見つけた弱い一点を繰り返し押す。それと同時に、田辺さんがクリトリスを一回転がした。
ぐっ♡ぐっ♡くりっ♡

「ああッ……♡♡んうッ……♡♡やっ……♡♡いっぺんに……ッ♡中と外が……ッ♡♡」

「連動してますね」

佐々木さんが言った。いつもと変わらない言い方だったが、少しだけ間があった。

「内部刺激がクリに出てる」

田辺さんが続けた。こちらはどこか楽しそうだった。

「は、はい……ッ♡どっちも……気持ちいいです……ッ♡恥ずかしいです……ッ♡」

「これが確認作業ですから。……転がすように触りますね」

そう言った田辺さんの指が、クリトリスの上でゆっくりと円を描き始めた。

くりくり♡くりくり♡くりくり♡くりくり♡くりくり♡くりくり♡
小さな粒を、丁寧にゆっくりと転がされる。

「んうッ♡♡あッ♡♡ひゃあッ♡♡ゆっくり、そこばかりッ♡♡やっ♡ま
たッ♡♡」

（やだ……ッ♡ゆっくりなのに、逃げられない……ッ♡）

ぐちゅっ♡くりくり♡ぐちゅっ♡くりくり♡ぐちゅっ♡くりくり♡ぐちゅっ♡くりくり♡

「ん……ッ♡二人がかりは……ッ♡だめです……ッ♡どっちも、気持ちよくて……ッ♡」

「いっぺんの方が確認しやすいんです。……優くん、我慢しようとしてる顔、すごくわかりやすいよ」

田辺さんがそう言った。責めるのではなく、ただ見ている目だった。それが余計に恥ずかしかった。

くりくり♡くりくり♡ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡

「あう……ッ♡♡んう……ッ♡♡ひゃっ……ッ♡♡もう、返事が……ッ♡♡」

「……少し強くしますね」

田辺さんがクリトリスを少し強く押しつけながら転がした。

ぎゅっ♡くりくり♡ぎゅっ♡くりくり♡ぎゅっ♡くりくり♡

「んッ……ッ♡あ……ッ♡そこは……ッ♡強くされると……ッ♡うま
く話せなくて……ッ♡」

（声、止まらない……ッ♡もう、だめ……ッ♡）

ぎゅっ♡くりくり♡ぐっ♡ぐっ♡

「んう……ッ♡♡あぁ……ッ♡♡♡ひゃ……ッ♡♡♡あっ、あ……ッ♡♡
♡」

腰が浮いて落ち着かなかった。逃げようとしても、田辺さんが腰をそつと押さえた。

「逃げないでください。確認中です」

佐々木さんがわずかに間を置いた。

「……そこまで感じるとは思っていませんでした」

佐々木さんは次の指示を口にするまで、一度だけ浅く息を吐いた。

「田辺くん、クリを指で挟んでみてください」

「了解」

「え……ッ♡挟む……んですか……ッ♡そこまで確かめるんですね……ッ

♡」

田辺さんの指がクリトリスを二本の指でそっと挟んだ。

ぎゅ♡ぎゅ♡

「ああッ……ッ♡♡♡ひゃっ……ッ♡♡んう……ッ♡♡♡」

（挟まれてる……ッ♡やだ……声が……でも……検査……ッ♡）

「……挟んだ状態で上下に転がしてください」

「はい」

ぎゅっ♡ぎゅっ♡ぎゅっ♡ぎゅっ♡ぎゅっ♡ぎゅっ♡ぎゅっ♡

「んう……ッ♡♡♡ああ……ッ♡♡♡ひゃ、ひゃあ……ッ♡♡♡♡もう、声
が……ッ♡♡♡」

「締め付けが出てきました。佐々木さん、内部もう少し強く」

「わかりました」

ぐっ♡ぐっ♡ぐっ♡ぐっ♡ぐっ♡ぐっ♡

「んああ……ッ♡♡♡やだ……ッ♡何かきそうで……ッ♡怖いです……ッ♡身体の奥が、勝手にきゅって……ッ♡」

「まだです。クリを少し締めて」

ぎゅっ♡ぎゅっ♡ぎゅっ♡ぎゅっ♡ぐっ♡ぐっ♡ぐっ♡ぐっ♡ぐっ♡

「んう……ッ♡♡♡んああ……ッ♡♡♡もう……ッ♡♡♡もう限界で……ッ♡何かきてしまいます……ッ♡イってしまいます……ッ♡」

「イッていいです。健診の工程です」

「え……ッ♡イッても、いいんですか……ッ♡は……ッ♡んああ……ッ♡
♡んう……ッ♡♡♡い……いってる……ッ♡♡♡」

ビクンッ♡ビクッ♡ビクンッ♡♡♡

「ああ……ッ♡♡♡♡♡ひぐッ♡♡♡♡いってる……ッ♡♡♡♡♡ん……ッ♡♡♡♡♡」

体が台の上で大きく震えた。内壁が何度も収縮し、佐々木さんの指を締め付ける。

（いってる……ッ♡初めて会った二人の指で、見られたままいかされてる……ッ♡）

「二回目確認。……田辺くん、指を離して」

「はい。……優くん、すごかったよ。台がびちゃびちゃ」

「そ、そんなに濡れていましたか……ッ♡見ないでください……ッ♡」

（気持ちよかったことまで見抜かれそうで、まともに顔を上げられない
……ッ♡）

余韻が体の奥からじわじわと広がっていた。佐々木さんがわずかに呼吸をついた。いつもより少し大きかった。それだけだったが、田辺さんがちらっと佐々木さんの顔を見た。何かを確認するように。

「……よく感じてくれました。次の確認に移ります」

「え……ッ♡まだ、続くんですか……ッ♡」

「クリトリスの連続反応を確認します。敏感なまま続けた方が確認精度が上がります」

「でも……ッ♡今すごく敏感で……ッ♡」

「その状態も確認します。田辺くん、続けてください」

「はい。……優くん、今度はクリを舐めますね」

「え……ッ♡舐める……んですか……ッ♡今いかされたばかりなのに、直接……ッ♡」

田辺さんが台の脇に屈んだ。そして、まだ敏感なクリトリスに直接舌を当てた。

「ひゃッ……♡♡♡あっ、ああ……ッ♡♡♡んひ……ッ♡♡♡舌……ッ

♡舌で直接……ッ♡敏感なのに……ッ♡♡♡んう……ッ♡♡♡♡」

（まだ敏感なのに……ッ♡でも、離れないで……ッ♡♡）

ちゅく♡ちゅく♡ちゅこ♡ちゅこ♡ちゅる♡ちゅる♡

田辺さんの舌がクリトリスをゆっくり舐め上げた。上から下へ、また上

へ。じつくりと丁寧に舐められる。急がない動きがかえってつらかった。体が跳ねそうになるのを、佐々木さんが腰を押さえて止めた。その手には、いつもより少しだけ力がこもっていた。

「ぐう……ッ♡♡♡舌で……ッ♡舐めて……ッ♡んあ……ッ♡♡♡♡♡♡
ゆっくりされると……ッ♡全部感じてしまつて……ッ♡んう……ッ♡♡♡♡♡♡
♡声が……声が止まらないです……ッ♡」
「佐々木さん、内部も動かしてください」
「わかりました」

佐々木さんの指が再び内部で動き始めた。さっきと同じ弱い一点を押しながら、抜き差しを加えていく。

ぐっ♡ぐっ♡ぐちゅっ♡ぐっ♡ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡

「ふぁ……ッ♡♡♡♡♡ひぐッ♡中も……ッ♡んう……ッ♡♡♡♡二人がかりで……ッ♡また……ッ♡あひ……ッ♡♡♡♡♡あッ♡あぁッ♡♡♡♡」
(中も、外も……ッ♡だめ、またくる……ッ♡)

ちゅ♡こ♡ぐちゅ♡♡ちゅ♡こ♡ぐちゅ♡♡ちゅ♡こ♡ぐちゅ♡♡

「んう……ッ♡♡♡♡♡ひぐッ♡♡♡♡♡あぁ……ッ♡♡♡♡♡んひい……ッ♡♡♡♡♡あッ♡♡♡♡♡」

今度は田辺さんが舌でクリトリスを吸い上げた。

ちゅ♡♡じゅ♡♡じゅ♡♡♡

「あひッ……♡♡♡♡♡ひゃ♡♡ひゃあ……ッ♡♡♡♡♡吸われると……ッ♡声^{こゑ}が止められません……ッ♡んう……ッ♡♡♡♡♡ひぐッ……♡♡♡♡♡」

「吸った方が反応出ますね。佐々木さん、確認できましたか」

「……できました」

佐々木さんの声が、また一段階低くなっていた。

「私も……連動して締め付けが強くなるのが、わかります」

記録を読み上げる声ではなかった。佐々木さん自身が指で感じ取ったものを口にする声に聞こえた。田辺さんが一瞬、顔を上げて佐々木さんを見た。

「んう……ッ♡♡♡また……ッ♡またきそうで……ッ♡どうすれば……ッ♡あっ……ッ♡♡♡♡舌が離れると、それも嫌で……ッ♡」

「隠さなくていい。そのままイッてください」

じゅっ♡ちゅこ♡ちゅこ♡じゅる♡ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡じゅるっ♡

「んう……ッ♡♡♡♡あひ……ッ♡♡♡♡いって……ッ♡いってしまいま
す……ッ♡ひぐッ♡♡♡♡んん……ッ♡♡♡♡」

ビクンッ♡♡ビクンッ♡♡ガクガクッ♡♡♡

「ひぎッ……♡♡♡♡んう……ッ♡♡♡♡いって……ッ♡♡♡♡あ
……ッ♡♡♡♡」

二回目の絶頂が来た。一回目よりずっと強く、体の奥から全部持ってい
かれるような感覚だった。頭が真っ白になった。

（また、いって……ッ♡舌、もっと……ッ♡）

「二回目。……くそ、すごい締め付けだ」

佐々木さんの声が、今度ははっきりと低かった。

「田辺」

田辺さんが顔を上げた。口元を手の甲で拭い、呼吸を乱していた。

「俺、もうかなりきてます。これ以上見せられたら抑えられない♡」
「私も同じです。……早く次へ進めましょう♡」

佐々木さんが、はっきりとそう言った。いつもの抑制がほとんど消えていた。

「ん あ あ♡♡」

返事が出なかった。体の奥がまだ細かく震えていた。

「触診は終わりです。次は拡張する。三段階、続けて確認します♡」

佐々木さんが言った。声が、さっきまでより低かった。それでも説明は依然として正確だった。

（言葉遣いが変わった。さっきまでの佐々木さんなら、きっと『拡張を行います』と言ったはずだ）

カートの上で金属のトレイが小さく鳴った。田辺さんが包装を剥がし、透明な器具へ潤滑剤を塗る。佐々木さんはそれを受け取ると、太さを見せ

るように僕の脚の間へ持ってきた。細長く、先端はなだらかな形をしていた。

「力を抜け。もっと奥まで入れます♡」
「はい」

先端が入り口に当てられた。そっと押される。

「んうッ」

ぬちゅ♡

器具がゆっくりと入ってきた。

「んっんあ♡♡これで、開くんですかッ♡」

（指とは違う形で、体を内側から押し広げられていく……ッ♡）

器具が奥まで届いたところで、一度止まった。潤滑剤の湿った音を立てながら、根元までゆっくりと収まっていく。

「んあッ♡♡奥まで入ったら、どうするんですかッ♡」

「この太さで開き方を見ます。返事をしながら、力を抜いてください♡」
「次。もっと太いのを入れます♡」

器具がゆっくりと引かれ、わずかに大きなものが準備された。

「ほら、また入れるぞ♡」

「あ、待ってください♡♡」

ずにゅッ♡

器具がじわじわと押し込まれた。

「んあッ♡♡さっきより太いッ♡これも、奥まで入れるんですかッ♡♡」

答えの代わりに器具がもう一段深く押し込まれた。ぐちゅぐちゅと湿った音が大きくなり、自分の中から鳴っているのだとわかって顔が熱くなる。

「田辺、今の音まで記録しろ♡」

「はいっていうか佐々木さん、さっきより声が低くないですか♡」

佐々木さんが少し間を置いた。

「いいから、早く記録しろ♡」

「はーい♡」

（音、聞かれてる……ッ♡恥ずかしい……ッ♡）

「んうッ♡♡音まで、聞かないでくださいッ♡」

（こんな音まで、記録される……ッ♡）

「最後だ。もっと大きく開くぞ♡」

さらに大きなものが準備され、入り口へ押し当てられた。
ずにゅッ♡ずにゅッ♡ずにゅッ♡ぬちゅッ♡ぬちゅッ♡
器具がじわじわと押し込まれる。

ずにゅ♡ずにゅ♡

「あぁッ♡♡♡ひぐッ♡ひぐうッ♡♡♡んんッ♡♡♡♡」

内壁が広がっていく感覚。

（広がってる……ッ♡奥まで器具の形に押し広げられてる……ッ♡）

「根元まで入った。このまま五分、開きっぱなしにする♡」

「えッ♡五分ですかッ♡このまま、開かれたままでッ♡」

器具が内部に収まったまま時間が流れる。

（何も動いていないのに、押し広げられた場所がずっと感じてる……ッ♡）

ぐちゅ♡ぐちゅ♡くちゅ♡くちゅ♡ぐちゅ♡ぐちゅ♡

「自分のおまんこが鳴ってるの、聞こえるか♡」

佐々木さんが言った。記録的な問いかけだったが、声が少し掠れていた。